研究主題「児童の語彙を豊かにする指導の工夫
－書くことにおける語彙指導を通して－」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
品川区立京陽小学校　主任教諭　角田　安代

第１　研究のねらい

小学校学習指導要領(平成 29 年３月告示)では、国語科〔知識及び技能〕の内容（１）言葉の特徴や使い方に関する事項の中に「語彙」の項目が新設され、学習の中で語句を使うことを通じて、日常生活でも使いこなせる語句を増やし、確実に習得していくことが重要であると示された。

平成 29 年度における品川区学力定着度調査の結果から､所属校の児童は書くことに関しての達成度の個人差が大きいことや、語彙の不足により、考えたことを話したり書いたりするなどの言語化する力が十分育っていないという結果が出ている。所属校では、書きたいことはあるものの書くことのできない児童の様子が見られた。これは、児童が知っている言葉が少ないことや、どの言葉を使えばいいのか分からないことが要因として考えられる。

語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。意味を理解している語句を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やし、語句の意味や使い方に対する認識を深めることで語彙の質を高め、語彙を豊かにすることができる。そのためには、継続的に語彙指導に取り組む必要がある。発達の段階に応じて語彙指導を工夫することによって、児童は意味を理解している語句（知っている語句）の量を増やすことができる。また、自分の経験したことや気持ちを書く経験を繰り返すことで、知っている語句から使いこなせる語句（使える語句）へと理解を深めることができると考え、研究主題を設定した。

第２　研究仮説

児童が知っている語句や使える語句を増やすための指導を工夫することで、児童の語彙は豊かになるだろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

(1) 語彙指導の先行研究を調べた結果、「辞書引き」、「読書」、「言葉集め」の実践例が多くあった。領域に着目して実践内容を分析すると、主として「読むこと」や「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する実践であり、「書くこと」の実践例は少なかった。

(2) 語彙の獲得について調べた結果、平成16年２月の文化審議会答申によると、３歳から11、12歳までは言葉の知識を吸収し、語彙が増える時期であり、小学校では、「話す・聞く」に加えて「読む・書く」の「繰り返し練習」により、国語力の基礎となる知識を身に付けさせることが重要であると分かった。

２　調査研究

教員の意識調査から、担当する学年の児童の語彙の量が今まで担当した学年の児童に比べて多いと感じるかについて「当てはまる」は０％、「やや当てはまる」は 13％

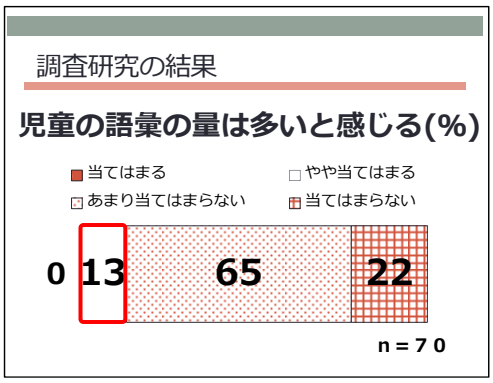

図１　児童の語彙の量は多いと感じる教員の割合

であった。この結果から、多くの教員が、児童の語彙の量に課題を感じていることが分かった（**図１**）。また、語彙の量を増やすための指導を重点的に行っている教員（Ａ群とする。）は約７割、重点的に行っていない教員（Ｂ群とする。）は約３割だった（**図２**）。

さらに、語彙の量を増やすために、Ａ群の教員が重点的に取り組んでいる学習内容は、「読書」、「言葉集め」、「辞書引き」であった。一方、Ｂ群の教員が、効果があると思う学習内容も、「読書」、「言葉集め」、「辞書引き」であり、Ａ群と一致した。また、「作文」、「短文作り」、「視写」を選んだ教員が「読書」等よりも比較的少ないことも分かった（**図３**）。

これらの結果から、児童の語彙の量に課題を感じ、語彙指導を重点的に行っている教員は多く、語彙指導と言えば「読書」や「辞書引き」等の指導が認知されていることが分かった。しかし、語彙を活用する段階である短文作りや作文等の「書くこと」の指導はあまり認知されていないのではないかと考えた。

語彙を豊かにするためには、意味を理解している語句を増やし、自分の経験したことや気持ちを書く経験を繰り返すことで、自分が知っている語句から使える語句を増やし、児童の語彙が豊かになっていくと考える。よって、「書くこと」における語彙指導の必要性は高いと考え、本研究を通して語彙指導の工夫を提案していく。

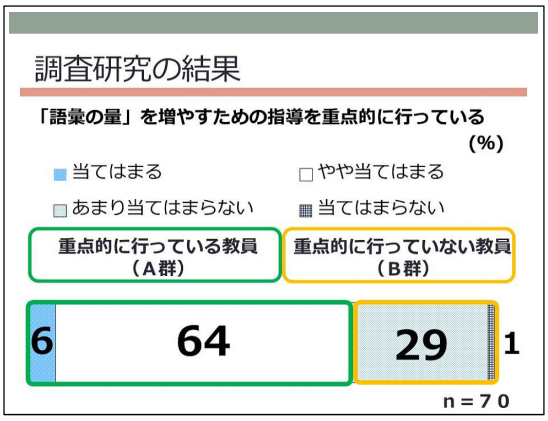

図２　「語彙の量」を増やすための指導を重点的に行っている割合

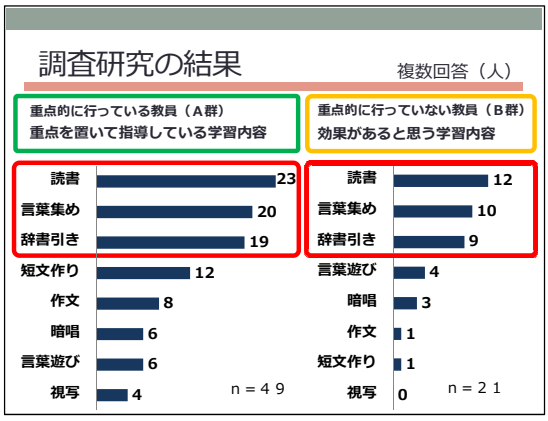

図３　「語彙の量」を増やすために
重点を置いて指導している学習内容（Ａ群）
効果があると思う学習内容（Ｂ群）

３　開発研究

(1) 知っている語句を増やすための手だて

児童の知っている語句を増やすための手だてとして、読書、言葉集め、辞書引き、暗唱、言葉遊び等の活動を取り入れることが有効だと考えた。検証授業では、言葉遊びや語句を増やす活動を授業の導入時や書く活動の前に取り入れ、単元指導計画に位置付けることで、児童が学習の中で必要となる多様な語句を意識できるようにした。

(2) 使える語句を増やすための手だて

児童の使える語句を増やすためには、児童が自分の知っている語句を使って書くことに繰り返し取り組むことが重要だと考えた。検証授業では、学習に関連する多様な語句や文の書き方等を示し、児童が日記や生活文を書く際に知っている語句や書き方等を意識できるようにした。

(3) 書くことへの意欲を高めるための工夫

児童の書くことへの意欲を高めるためには、自分の書いたことが読んだ人に伝わり、児童が同意や共感等を得られることが大事だと考えた。検証授業では、児童が書いた文章を互いに読み合い、良いところを付箋紙に書いて伝え合うという活動を行うことで、自らの学習を振り返り、次の書くことへの意欲を高められるようにした。

4　検証授業

(1) 検証授業の概要（平成 30 年９月実施）

都内公立小学校で第１学年「こんなことをしたよ」（全５時間）と第２学年「今週のニュース」（全２時間）において検証授業を実施した。

(2) 児童の使える語句の量的変化

検証授業では、まず、多様な気持ちを表す言葉があることを意識させてから、日記や生活文を書く活動を行った。検証授業前後で、出来事に対する気持ちを表す言葉を書いていない児童が 156 人中 41 人から９人に減った。また、時間内に全く書くことができず白紙だった児童がいなくなり、全員が授業時間内に書くことができた（**図４**）。

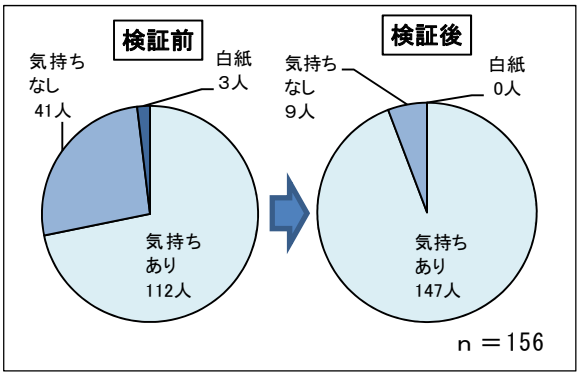

図４　気持ちを表す言葉の使用の変化

また、気持ちを表す言葉を書いた児童の中で、どのような言葉を使っているかを調べると、「楽しかった」、「うれしかった」以外の気持ちを表す言葉が、42 語から 97 語へ２倍以上に大きく増えた。気持ちを表す言葉の数が増えたのは、児童が今まで使っていた「楽しかった」、「うれしかった」以外に、多様な気持ちを表す言葉があることを知り、自分の気持ちを表す言葉を適切に選んで書くことができたからだと考えられる（**図５**）。

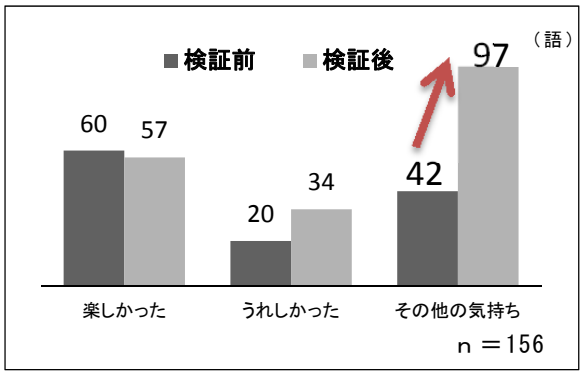

図５　気持ちを表す言葉の種類の変化

(3) 児童の使える語句の質的変化

第１学年では、第１時「おにごっこをしたこと」と第５時「三連休での出来事」について書いた絵日記を比べた。Ａ児の文章は、第１時では主語や気持ちが書かれていないが、第５時では主述が正しく書け、「こわそうだったけど、楽しかった。」という気持ちも書くことができている（**図６**）。

「おにごっこ」
かわりおにをしていっぱいおにのあいだをとおりぬけた。
（第１時）

「ゆうえんち」
ぼくはおばあちゃんちにいきました。それでゆうえんちにいきました。それでいろんなのりものにのりました。ちょっとこわそうなゆうぐもあったけどぜんぶたのしかったです。
（第５時）

図６　第１学年Ａ児の変化（波線部は気持ちを表す）

第２学年では、検証授業前後に書いた今週のニュースを比べた。Ｂ児の文章は、どちらも、いつ、何をしたという書き方ができている。気持ちを表す言葉については、検証授業前は記載がなかった。検証授業後は「気持ちがよくなって、給食がおいしく感じられた。」

今日、おにいちゃんとべんきょうをしました。わからないところを教えてもらいました。つぎはたよらないようにします。
（検証前）

今日、じゅぎょうで体育がありました。（中略）ジャンプをしたり走ったりして、教室に帰ったあとも、とても気持ちがよくなって、きゅうしょくもおいしくかんじられました。すごくおもしろかったです。
（検証後）

図７　第２学年Ｂ児の変化（波線部は気持ちを表す）

という表現が加わり、多様な言葉で気持ちをより詳しく表現することができている（**図７**）。

Ａ児もＢ児も継続的に日記等を書くことで、自分が経験したことや気持ちを表す言葉が増え、使える語句が増えていることが分かる。

(4) 児童の書くことへの意欲の変化

検証授業の最後に、友達の絵日記や今週のニュースに対して児童が書いた内容を分析した。友達に共感したり、励ましたり、アドバイスをしたりする言葉が多く見られた（**図８**）。また、最初は気持ちを表す言葉の記載がなかった児童の学習感想を分析すると、「色々な気もちがあることを知って、もっと色々な言葉を使いたいと思った。」や「友達に書いたり、書いてもらったりするのが楽しかった。」という記述が見られた（**図９**）。

わたしは、今日一、二時間目がおまつりで、うれしかったです。でも、わたしは、六年一組のゲームがしたかったのに、一年生はちがうのをしたかったから、一年生が、うらやましくなりました。（第５時）

たしかに。自分がしたいのを一年生にゆずらないといけないから「いいなあ。」と思うよね。（友達１）

同じだね。わたしも六年一組に行きたかったよ。だけど一年生がうれしいなら、わたしもうれしい気もちになったからあんしんしてね。（友達２）

がまんした。えらかったね。（友達３）

図８　Ｃ児に対する友達からの感想（波線部は筆者）

・私は、今週のニュースがじょうずになりました。そしていろいろな気もちがあるんだなと思いました。つぎはもっと書けるようにしたいです。

・いろいろな気もちがあるって知ってよかったと思いました。今週のニュースをじょうずになりたいです。

・友だちのひょうかを書くことが楽しかったです。友だちが、自分の今週のニュースに、どんなひょうかを書いているのか楽しみです。

図９　学習感想（波線部は筆者）

これらのことから、児童は書いたものを友達と読み合い、良いところを伝え合うことで、同意や共感を得ることができ、次の書くことへの意欲を高められることが分かった。

第４　研究の成果

研究の成果として、以下の点が重要であることが明らかになった。

・児童の知っている語句を増やすためには、児童が授業の導入時や書く活動の前に多様な語句を知り、学習の中で必要となる語句を意識できるようにすること。

・児童の使える語句を増やすためには、児童が自分の知っている語句を使って書くことに継続して取り組むこと。

・児童の書くことへの意欲を高めるためには、児童が書いた文章を互いに読み合い、良いところを伝え合い、同意や共感を得る経験を重ねることで、次の書くことへの意欲を高めること。

これらのことから、児童が知っている語句や使える語句を増やすために、継続的に語彙指導に取り組み、発達の段階に応じて語彙指導を工夫し、書く経験を繰り返すことで、児童の語彙を豊かにすることができると分かった。

第５　今後の課題

今後も継続的に語彙指導に取り組むために、児童の語彙を豊かにする指導の工夫を取り入れた年間指導計画を所属校にて提案していく。